



Title	第1章 アイヌの家族形成と子育て
Author(s)	品川, ひろみ
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 35, 11-25
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61391
Type	departmental bulletin paper
File Information	100_ch1.pdf



第1章 アイヌの家族形成と子育て

品川ひろみ | 札幌国際大学短期大学部教授

はじめに

本章では現代アイヌの人々の家族の形成過程と生活の現状、さらにアイヌであることをどのように捉え子どもに伝えているのかについて、2008年「北海道アイヌ民族生活実態調査」のデータと、2009年におこなった「札幌」「むかわ」のインタビュー調査、2012年から2014年にかけて行った「新ひだか」「伊達」「白糠」でのインタビュー調査の結果をもとに、現代社会に生活するアイヌの人々の家族の状況を明らかにする。

その際、アイヌの血筋、世帯の状況、アイヌ文化の経験、結婚や子育てに対する意識などを用いて、地域によってアイヌの人々が家族を形成していく過程に違いがあるのかについて見ていく。また子育てについては、生まれ育った家族での経験と、親として子育てをする際に、アイヌであることをどのように捉え子どもに伝えるのかという視点を持ち、地域の比較を試みる。

第1節 対象者の概要とアイヌの血筋

第1項 対象者の概要

はじめに本調査の対象である各地域のアイヌの人々の年齢層と性別を確認しておこう。インタビューの対象となったのは、札幌では男性25人、女性26人、むかわでは男性31人、女性30人、新ひだかでは男性27人、女性30人、伊達は男性15人、女性32人、白糠は男性15人、女性33人と伊達と白糠は女性の比率が高くなっている。これらの対象者の中には札幌5名、むかわ11名、新ひだか5名、伊達9名、白糠10名の和人が含まれている。

年齢層で見ると札幌調査では、男性の青年層が40.0%と他の年代より多いが、女性は青年層が7.7%と他の年齢層より少ない。むかわは男性で老年層が多く、女性は壮年層が多い。新ひだかは男女ともに青年層が少なくなっている。伊達は男性では老年層が多く女性は青年層が少ない。白糠は男性では青年層が多く女性は老年層が多い（表1-1）。

表1-1 地域・年齢・性別対象者

		札幌		むかわ		新ひだか		伊達		白糠	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
実数	青年層	10	2	7	10	4	5	4	5	6	10
	壮年層	7	12	10	13	11	15	4	16	5	7
	老年層	8	12	14	7	12	10	7	11	4	16
	合計	25	26	31	30	27	30	15	32	15	33
構成比	青年層	40.0	7.7	22.6	33.3	14.8	16.7	26.7	15.6	40.0	30.3
	壮年層	28.0	46.2	32.3	43.3	40.7	50.0	26.7	50.0	33.3	21.2
	老年層	32.0	46.2	45.2	23.3	44.4	33.3	46.7	34.4	26.7	48.5
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

第2項 アイヌの血筋

現代のアイヌの人々の血筋は混血が進み、3世代あるいは4世代にわたって「純血」である者は、ごくわずかであるといわれている。またそれと同時に「純血」性の低下は、個人の行動や意識に影響を与える可能性が高いことも指摘されている（小内 2014）。これら血筋の「純血」性は、家族の形成過程や子どもを育てる意識にも影響を与える重要な要素である。

アイヌの血筋を2008年におこなったアンケート調査の結果と比較して見てみよう。2008年の「北海道アイヌ民族生活実態調査」では（以下、北海道調査）、本人の血筋がアイヌである者が全体の64.7%、和人配偶者や和人養子、外国人配偶者などの非アイヌが26.3%であった。一方、札幌、むかわ、新ひだか、伊達、白糠の結果を見ると、本人の血筋がアイヌである者は、新ひだか91.2%、札幌90.2%、むかわ83.6%、伊達80.9%、白糠77.1%と、北海道調査と比較して高い比率である（表1-2）。

これは本調査が北海道アイヌ協会の協力を得て対象を選定していることから、1家族から複数の対象者が出ていることも影響している。北海道調査と比較して和人配偶者の比率が低いことが主要な要因とみることができる。いいかえれば本調査の対象者では、和人配偶者や和人養子等は少なく、アイヌの血筋を引く者が多いといえよう。

表1-2 対象者の血統

	北海道		札幌		むかわ		新ひだか		伊達		白糠	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
アイヌ	3,691	64.7	46	90.2	49	80.3	52	91.2	38	80.9	37	77.1
非アイヌ	1,498	26.3	5	9.8	11	18.0	5	8.8	9	19.1	10	20.8
不明	339	5.9	0	0.0	1	1.6	0	0.0	0	0.0	1	2.1
無回答	175	3.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合計	5,703	100.0	51	100.0	61	100.0	57	100.0	47	100.0	48	100.0

第3項 アイヌの「純血」性

対象者にアイヌの血筋を引く者が多いことを確認したが、地域による違いはあるのだろうか。

血筋の濃さという点から、本人より上の世代について整理したところ、「父母祖父母ともにアイヌ」である者は、北海道調査全体ではわずか5.7%であるが、5地域の結果を見ると、最も比率が高い白糠では12人25.0%、伊達が6人12.8%、札幌5人9.8%、むかわ6人9.8%、新ひだかが4人7.0%であった。

さらに「純血」性という視点で見ると、祖父母まですべてアイヌという3世代「純血」である比率は白糠で16.7%、伊達12.8%、新ひだか7.0%、札幌9.8%、むかわ9.8%である（表1-3）¹⁾。

さらにその上の曾祖父・曾祖母までがすべてアイヌである4世代「純血」である比率は、白糠で12.5%、新ひだかで7.0%、伊達で6.4%、札幌5.9%、むかわ3.3%と、さらに低くなる²⁾（表1-4）。

これらを見ると、白糠の比率が他の地域より高いことがわかる。ただし先に述べたように白糠と伊達では1家族から数人の対象者がいることで、「純血」の比率が高く出ている可能性がある。しかしそれを考慮したとしても本調査の対象者は、北海道調査より「純血」の比率が高いと見ることができる。

またアイヌの血筋であるか否かは、インタビューの中で本人が「アイヌの血筋」であるとした者

をカウントしている。つまり自分の親がアイヌだとしても、祖父母のことは「わからない」「聞いたことがない」とアイヌであることが明確でない場合はアイヌとしてカウントしていない。

対象者のなかには、父母のことはわかるが、祖父母のこととなるとすべては「わからない」とする者も見られた。とくに曾祖父、曾祖母となると、8名のルーツをすべて確認できていなければならず、一部が不明である者も少なくなかった。これらのことを考え合わせれば、実際の4世代「純血」アイヌの比率は、先に見た数値よりも多少高い可能性も考えられる。

表1-3 アイヌの血統割合

「純血」性	北海道		札幌		むかわ		新ひだか		伊達		白糠	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
父母祖父母ともアイヌ	327	5.7	5	9.8	6	9.8	6	10.5	6	12.8	12	25.0
父母のみアイヌ	744	13.0	10	19.6	11	18.0	22	38.6	8	17.0	11	22.9
父のみアイヌ	1,269	22.3	12	23.5	10	16.4	8	14.0	10	21.3	2	4.2
母のみアイヌ	1,287	22.6	16	31.4	18	29.5	17	29.8	10	21.3	13	27.1
父母とも和人	1,221	21.4	4	7.8	9	14.8	2	3.5	9	19.1	9	18.8
その他	24	0.4	0	0.0	0	0.0	2	3.5	0	0.0	0	0.0
不明・無回答	831	14.6	4	7.8	7	11.5	0	0.0	4	8.5	1	2.1
計	5,703	100	51	100.0	61	100.0	57	100.0	47	100.0	48	100.0

表1-4 「純血」性・世代

	北海道		札幌		むかわ		新ひだか		伊達		白糠	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
3世代「純血」アイヌ	218	3.8	5	9.8	6	9.8	6	10.5	6	12.8	8	16.7
4世代「純血」アイヌ	109	1.9	3	5.9	2	3.3	4	7.0	3	6.4	6	12.5

第4項 アイヌの血筋 ―性別と地域―

アイヌの血筋の濃さに違いがあるのかについて、父母ともにアイヌの血筋、どちらかがアイヌの血筋、父母ともに和人の血筋について、祖父母、曾祖父母の代までを確認した。

アイヌの血筋の濃さを男女別で比較してみると、父母・祖父母ともにアイヌである男性は伊達と白糠で20%、むかわ12.9%、新ひだか7.4%、札幌は4.3%である。女性では白糠が27.3%、札幌14.3%、新ひだか13.3%、伊達9.4%、むかわ6.7%、となっており、白糠、新ひだか、札幌では女性の方が父母・祖父母ともにアイヌである比率が高く、むかわと伊達では男性の方が高い。

また、父母ともにアイヌである者は、新ひだかの男性59.3%、白糠の女性51.5%、札幌の女性42.9%、白糠の男性40.0%、新ひだかの女性40.0%などである。

白糠は男女ともにアイヌの血筋が濃く、とくに女性の比率が高いといえる。では父母・祖父母ともにアイヌである者と、父母のどちらかが和人である者ではどのような比率だろうか。父母・祖父母すべてがアイヌの血筋である者が、父母のどちらかが和人である者を上回るのは、新ひだかの男性、白糠の男性、白糠の女性だけである。これらのことから白糠が男女ともにアイヌの血筋が濃いことがわかる。

さて、父母のどちらかが和人である者に焦点をあて男女別で見ると、札幌の男性が73.9%、むかわ、新ひだか、伊達の女性がともに50%である。札幌の男性73.9%は突出して多いが、それ以外の地域では女性の比率の方が高く、アイヌの混血は男性よりも女性において進んでいると見ることができる（表1-5）。

表1-5 男女別親の血統比率

	「純血」性	男性					女性				
		札幌	むかわ	新ひだか	伊達	白糠	札幌	むかわ	新ひだか	伊達	白糠
実数	父母祖父母ともアイヌ	1	4	2	3	3	4	2	4	3	9
	父母のみアイヌ	2	7	14	2	3	8	4	8	6	8
	父のみアイヌ	10	5	3	4	1	2	5	5	6	1
	母のみアイヌ	7	8	7	3	3	9	10	10	10	10
	父母とも和人	1	1	0	2	4	3	8	2	7	5
	その他	2	6	1	1	1	2	1	1	0	0
	計	23	31	27	15	15	28	30	30	32	33
構成比	父母祖父母ともアイヌ	4.3	12.9	7.4	20.0	20.0	14.3	6.7	13.3	9.4	27.3
	父母のみアイヌ	8.7	22.6	51.9	13.3	20.0	28.6	13.3	26.7	18.8	24.2
	父のみアイヌ	43.5	16.1	11.1	26.7	6.7	7.1	16.7	16.7	18.8	3.0
	母のみアイヌ	30.4	25.8	25.9	20.0	20.0	32.1	33.3	33.3	31.3	30.3
	父母とも和人	4.3	3.2	0.0	13.3	26.7	10.7	26.7	6.7	21.9	15.2
	その他	8.7	19.4	3.7	6.7	6.7	7.1	3.3	3.3	0.0	0.0
	計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

第2節 家族形成

第1項 婚姻の状況

現在の婚姻の状況について5地域の男女別で見ると、未婚である者は、札幌の男性28.0%、女性11.5%、むかわの男性12.5%、女性10.3%、新ひだかの男性18.5%、女性10.0%、伊達の男性40.0%、女性3.1%、白糠の男性20.0%、女性12.1%と地域によって比率に差がある。

とくに伊達の男性は4割が未婚である。伊達の未婚7名の内訳を見ると、青年層は3名のみで、壮年層1名、老年層3名となっており、半数以上が若年ではないことがわかる。その4名について詳しく見ると、4名とも男性であった。彼らは結婚はしていないものの、自身がアイヌ民族であることを意識したことや、アイヌ民族であることを交際相手に伝えた経験を持っていた。

さて、既婚者に目を向けると、地域別では札幌の女性が38.5%と低いものの、他は5割前後以上となっている。とくにむかわ、新ひだか、白糠の3地域については、男性が7割以上と多くの者が結婚していることがわかる。

また、それら3地域に着目すると、この地域では男性の離別が少ないことがわかる。むかわは9.4%、新ひだかは0.0%、白糠は6.7%となっている。しかし女性はそれに反して、むかわ20.7%、新ひだか23.3%、白糠9.1%と、男性より高い。さらにこの3地域以外にも、伊達25.0%、札幌では30.8%と、女性の離別経験者は男性と比較して高い結果となっている（表1-6）。

表1-6 婚姻比率

		札幌		むかわ		新ひだか		伊達		白糠	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
実数	未婚	7	3	4	3	5	3	6	1	3	4
	既婚	14	10	24	15	20	16	7	18	11	17
	離別	1	8	3	6	0	7	2	8	1	3
	死別	2	5	0	2	2	4	0	5	0	9
	再婚	1	—	1	3	—	—	—	—	—	—
	合計	25	26	32	29	27	30	15	32	15	33
構成比	未婚	28.0	11.5	12.5	10.3	18.5	10.0	40.0	3.1	20.0	12.1
	既婚	56.0	38.5	75.0	51.7	74.1	53.3	46.7	56.3	73.3	51.5
	離別	4.0	30.8	9.4	20.7	0.0	23.3	13.3	25.0	6.7	9.1
	死別	8.0	19.2	0.0	6.9	7.4	13.3	0.0	15.6	0.0	27.3
	再婚	4.0	—	3.1	10.3	—	—	—	—	—	—
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

第2項 アイヌの血筋と婚姻

先にアイヌの血筋について地域と男女別に着目して見てきた。その結果、地域によってアイヌの血筋の濃さに違いがあること、性別で見た場合には女性の方が混血の比率が進んでいることがわかった。これまでの報告書においても、アイヌの人々は時代背景の中で、アイヌの血を薄めるために和人と婚姻を望んだということが指摘されている。

現在の混血の進展はその結果であるともいえる。アイヌ同士の婚姻の組み合わせは1割台になっていたことや、和人男性と婚姻したアイヌ女性が離婚しやすい傾向があることも指摘されている。先に見た男女別の離別者も女性の方が多いことも確認した（小内 2014）。そこで婚姻状況をアイヌ民族であるか否かという視点で見てみる。

北海道調査において自身がアイヌであり配偶者もアイヌである者の比率は、男性 13.5%、女性 16.8%である。自身がアイヌで配偶者が和人である比率は男性 44.1%、女性 36.1%とアイヌ男性が和人女性の配偶者を持つ比率が高かった（表 1－7）。

表 1－7 血統別婚姻比率（北海道調査）

		男性	女性	合計
実数	アイヌ配偶者を持つアイヌ	300	381	681
	和人配偶者を持つアイヌ	982	833	1,815
	未婚アイヌ	520	374	894
	和人配偶者を持つアイヌ	426	678	1,104
	合計	2,228	2,266	4,494
構成比	アイヌ配偶者を持つアイヌ	13.5	16.8	15.2
	和人配偶者を持つアイヌ	44.1	36.8	40.4
	未婚アイヌ	23.3	16.5	19.9
	和人配偶者を持つアイヌ	19.1	29.9	24.6
	合計	100.0	100.0	100.0

5つの地域について見ると、自身がアイヌで配偶者もアイヌである者が最も高い比率なのは、新ひだかの女性、37.0%である。しかし新ひだかの男性は 15.4%と半数以下となっている。男女ともに同程度なのがむかわと伊達である。むかわは男性が 25.8%、女性が 21.4%、伊達は男性 21.4%、女性 24.1%である。白糠は男性が 7.1%と低い比率であるが、女性は 25.8%と男性の 3 倍程度になっている。これらの中で最も着目されるのが、札幌の女性が 0.0%、つまり自分自身がアイヌで配偶者もアイヌである者が見られなかったことである。札幌は男性も女性ほどではないが 17.4%と高いとはいえない比率である。

次に自分自身はアイヌであるが、配偶者は和人である比率を見ると、札幌の女性が 73.1%と最も高い。また男性も 47.8%と半数近い。先に見たように札幌のアイヌ女性にはアイヌ配偶者を持つ者がいないことから、既婚者のアイヌ女性の配偶者は全員が和人であるとみることができる。これらのことから、札幌ではアイヌの血筋の混血化が進んでいるといえよう（表 1－8）。

表1－8 血統別婚姻比率

		札幌		むかわ		新ひだか		伊達		白糠	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
実数	アイヌ配偶者を持つアイヌ	4	0	8	6	4	10	3	7	1	8
	和人配偶者を持つアイヌ	11	19	17	10	16	11	3	14	6	13
	未婚アイヌ	7	3	4	3	5	3	6	1	3	4
	和人配偶者	1	4	2	9	1	3	2	7	4	6
	計	23	26	31	28	26	27	14	29	14	31
構成比	アイヌ配偶者を持つアイヌ	17.4	0.0	25.8	21.4	15.4	37.0	21.4	24.1	7.1	25.8
	和人配偶者を持つアイヌ	47.8	73.1	54.8	35.7	61.5	40.7	21.4	48.3	42.9	41.9
	未婚アイヌ	30.4	11.5	12.9	10.7	19.2	11.1	42.9	3.4	21.4	12.9
	和人配偶者	4.3	15.4	6.5	32.1	3.8	11.1	14.3	24.1	28.6	19.4
	計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

※不明を除く

第3項 婚姻と民族性

アイヌの血筋を持つ既婚者に対して、結婚の際にアイヌという民族性を意識したかについて聞いた。

結婚の際に民族性を意識した者が多い地域を見ると、新ひだかの男性50.0%、女性52.0%、白糠男性42.9%、女性39.0%が高い比率である。逆に低い地域を見ると、伊達の男性0%、女性17.4%が突出している。むかわは男性26.9%、女性20.0%、札幌は男性15.8%、女性35.3%である。

これらの結果を見ると、札幌を除き男女の差よりも地域の差があることがわかる。つまり結婚の際にアイヌであるという民族性を意識するのは、男女による違いよりも居住する地域の影響の方が大きいのである。新ひだかと白糠は父母・祖父母ともアイヌ＋父母のみアイヌの割合が高い2地域である（表1－3）。アイヌの血筋が色濃い地域では、そのことを意識することは当然ともいえる。

またそれが結婚ということになると、異なる傾向も見える。結婚の際にアイヌであることが影響したか否かは、すべての地域において男性よりも女性の方が影響したと答える比率が高い。とくに新ひだか、伊達、白糠の3地域では、結婚の際に民族性を意識する者よりも、結婚の際にアイヌであることが影響したとする者の方が少ない。つまり結婚する際に、アイヌ民族であることを意識してはいても、実際に結婚に影響した者はそれよりは少ない。さらにそれを男女別に見ると、男性の方が影響した者が少ない。つまり男性は結婚の際に民族性は意識するものの、結婚に影響した者が少ないが、女性は男性に比べると実際にも影響した者が多いといえる（表1－9）。このようにアイヌ民族であることの影響は地域の差と男女の差が影響し合っていると見ることができる。

表1－9 婚姻への影響

			札幌		むかわ		新ひだか		伊達		白糠	
			男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
実数	結婚の際民族性を	意識した	3	6	7	4	10	11	0	4	3	9
		しなかった	16	11	19	16	10	10	7	19	4	14
	アイヌであることが	影響した	7	11	7	9	2	8	0	3	0	5
		しなかった	16	18	23	20	17	12	7	21	5	13
構成比	結婚の際民族性を	意識した	15.8	35.3	26.9	20.0	50.0	52.4	0.0	17.4	42.9	39.1
		しなかった	84.2	64.7	73.1	80.0	50.0	47.6	100.0	82.6	57.1	60.9
	アイヌであることが	影響した	30.4	37.9	23.3	31.0	10.5	40.0	0.0	12.5	0.0	27.8
		しなかった	69.6	62.1	76.7	69.0	89.5	60.0	100.0	87.5	100.0	72.2

第3節 世帯の状況

第1項 世帯構成

世帯の状況を見てみよう。北海道調査の結果を見ると、2人世帯が24.8%と最も多いが、3人世帯も20.4%、4人が18.4%、1人が16.7%と4人世帯までで全体の8割となる。

5地域における世帯人数を見ると、札幌は2人世帯が25.5%と最も多く、4人世帯以下が8割を超えるなど北海道調査と同様の傾向となっている。

それ以外の地域においても4人世帯以下が多いのは同様の傾向であるが、新ひだかと白糠では2人以下の世帯が半数を超えるという現状である。白糠は1人世帯が6.3%とさほど多くはないが、2人世帯が45.8%と非常に高い比率になっている。

新ひだかでは1人世帯が19.3%、2人世帯が33.3%と2人以下の世帯が約半数となっている。3人以上の世帯は、3人世帯17.5%、4人世帯14.0%と人数が多くなるにしたがい比率は低くなっている。また、伊達では1人世帯と6人以上の世帯がともに15.2%で、2人世帯、3人世帯、4人世帯が21.7%と同比率となっている（表1－10）。

表1－10 世帯規模比率

世帯の人数	北海道		札幌		むかわ		伊達		新ひだか		白糠	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
1人	484	16.7	10	19.6	2	3.3	7	15.2	11	19.3	3	6.3
2人	718	24.8	13	25.5	20	32.8	10	21.7	19	33.3	22	45.8
3人	589	20.4	10	19.6	12	19.7	10	21.7	10	17.5	9	18.8
4人	530	18.3	9	17.6	11	18.0	10	21.7	8	14.0	9	18.8
5人	360	12.5	5	9.8	6	9.8	2	4.3	4	7.0	3	6.3
6人以上	210	7.3	4	7.8	10	16.4	7	15.2	5	8.8	2	4.2
合計	2,891	100.0	51	100.0	61	100.0	46	100.0	57	100.0	48	100.0

※伊達の壮年層1名は不明のため除いている

第2項 年齢層ごとの世帯人数

世帯人数は現在の生活状況を表す1つの要因である。また、世帯の規模は年齢層によって異なることも予測される。そこで年齢層と地域で世帯の比率を明らかにした。

平均的な世帯人数である3～4人の比率を見ると、白糠を除きどの地域も壮年層が高い比率である。5人以上の大規模世帯は札幌と伊達ではどの年齢層も同程度であるが、むかわでは7割近くが青年層となっていた。

また2人以下の世帯は、どの地域でも老年層が多い。しかしその比率には違いが見られ、むかわ68.2%、伊達64.7%、白糠68.0%と2人以下の小規模世帯が6割を超えている（表1－11）。このように、世帯人数は地域と年齢層によって異なっており、一部の地域において老年層の小規模世帯が目立っていた。

表 1 - 11 年齢層別世帯規模比率

		札幌			むかわ			新ひだか		
		2人以下	3～4人	5人以上	2人以下	3～4人	5人以上	2人以下	3～4人	5人以上
実数	青年層	5	4	3	0	6	11	9	0	0
	壮年層	6	10	3	7	11	5	14	7	5
	老年層	12	5	3	15	6	0	15	6	1
	合計	23	19	9	22	23	16	38	13	6
構成比	青年層	21.7	21.1	33.3	0.0	26.1	68.8	22.5	0.0	0.0
	壮年層	26.1	52.6	33.3	31.8	47.8	31.3	35.0	53.8	83.3
	老年層	52.2	26.3	33.3	68.2	26.1	0.0	37.5	46.2	16.7
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	95.0	100.0	100.0

		伊達			白糠		
		2人以下	3～4人	5人以上	2人以下	3～4人	5人以上
実数	青年層	1	5	3	3	11	2
	壮年層	5	11	3	5	4	3
	老年層	11	4	3	17	3	0
	合計	17	20	9	25	18	5
構成比	青年層	5.9	25.0	33.3	12.0	61.1	40.0
	壮年層	29.4	55.0	33.3	20.0	22.2	60.0
	老年層	64.7	20.0	33.3	68.0	16.7	0.0
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

第3項 老年層に見られる小規模世帯の実情

2人以下の小規模世帯は老年層に多く見られることが確認された。これまでの調査においても高齢のアイヌの世帯の厳しい生活状況が明らかになっていた。そこで5つの地域の老年層の小規模世帯の64名を取り出し、年収、婚姻状況、子どもの居住地の状況について整理した。

まず年収について見ると、地域によって異なる状況が明らかになった。札幌とむかわでは年収が100万円～200万円未満の世帯が7割以上見られ、男性では200万以上も半数以上となっている。しかしそれ以外は年収の低さが目立つ。新ひだかの男性層で300万以上が3割程度確認できるだけで、多くが100万円～200万円未満の世帯年収となっている。

とくに白糠の女性は生活保護が7割、100万円未満の世帯が3割となっており、1人世帯の男性も100万円未満の年収と非常に厳しい現状が見てとれる。また新ひだかも白糠ほどではないが、女性層では生活保護と年収100万円未満が合わせて8割となっている。

婚姻の状況はどうだろうか。先に見た経済的に厳しい白糠では死別が50.0%、未婚が10.0%と6割が配偶者がいない状況であることがわかる。他の地域においても未婚・離別・死別を合わせ、半数以上となるのは、札幌の女性・男性、むかわの女性、新ひだかの女性、伊達の女性は、配偶者がいない現状である。

年収は低く配偶者もいない厳しい生活の中で、子どもとの交流はどうだろうか。子どもの居住地について見ると、最も生活が厳しい地域である白糠では、同居の2名に加え、子どもが町内に居住している者が多く、女性の1名を除きすべてが近隣である。しかし子どもからの経済的な支援は確認されない。そのことは、子ども世代も親に経済的な援助をできる余裕がないと推察される。

また、子どもの居住先が本州である者は13名20.3%と2割程度であるが、すべての子どもが本州に居住しているのはそのうち5名だけである（表1-12）。

このように高齢の小規模世帯では、地域によって差が見られた。とくに白糠と新ひだかの女性層

が厳しい生活を余儀なくされていることが浮き彫りになった。

表1-12 老年層の小規模世帯状況

			札幌		むかわ		新ひだか		伊達		白糠	
			女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
年 収	実 数	生活保護	0	0	0	0	3	1	0	1	7	0
		100万未満	2	1	1	2	2	1	2	3	3	1
		100万～200万	3	1	2	3	0	3	2	1	0	0
		200万～300万	0	2	1	0	1	1	1	1	0	0
		300万以上	3	0	0	6	0	3	0	0	0	0
		合計	8	4	4	11	6	9	5	6	10	1
	構 成 比	生活保護	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0	11.1	0.0	16.7	70.0	0.0
		100万未満	25.0	25.0	25.0	18.2	33.3	11.1	40.0	50.0	30.0	100.0
		100万～200万	37.5	25.0	50.0	27.3	0.0	33.3	40.0	16.7	0.0	0.0
		200万～300万	0.0	50.0	25.0	0.0	16.7	11.1	20.0	16.7	0.0	0.0
		300万以上	37.5	0.0	0.0	54.5	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0	0.0
		合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
婚 姻 状 況	実 数	既婚	2	2	2	10	3	7	2	1	4	1
		離別	3	1	1	1	2	0	1	2	0	0
		死別	3	1	1	0	1	1	2	0	5	0
		未婚	0	0	0	0	0	1	0	3	1	0
		合計	8	4	4	11	6	9	5	6	10	1
	構 成 比	既婚	25.0	50.0	50.0	90.9	50.0	77.8	40.0	16.7	40.0	100.0
		離別	37.5	25.0	25.0	9.1	33.3	0.0	20.0	33.3	0.0	0.0
		死別	37.5	25.0	25.0	0.0	16.7	11.1	40.0	0.0	50.0	0.0
		未婚	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.1	0.0	50.0	10.0	0.0
		合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
子 ど も の 居 住 地	実 数	子ども近隣	0	0	1	0	3	1	1	1	6	1
		子ども道内	1	1	1	3	0	1	0	1	0	0
		同居	1	0	0	7	0	0	1	0	2	0
		道内・道外	3	0	0	0	1	1	2	0	1	0
		道外のみ	0	2	1	0	1	1	0	0	0	0
		子どもなし	1	1	0	1	1	2	0	3	1	0
		不明	2	0	1	0	0	3	1	1	0	0
		合計	8	4	4	11	6	9	5	6	10	1
	構 成 比	子ども近隣	0.0	0.0	25.0	0.0	50.0	11.1	20.0	16.7	60.0	100.0
		子ども道内	12.5	25.0	25.0	27.3	0.0	11.1	0.0	16.7	0.0	0.0
		同居	12.5	0.0	0.0	63.6	0.0	0.0	20.0	0.0	20.0	0.0
		道内・道外	37.5	0.0	0.0	0.0	16.7	11.1	40.0	0.0	10.0	0.0
		道外のみ	0.0	50.0	25.0	0.0	16.7	11.1	0.0	0.0	0.0	0.0
		子どもなし	12.5	25.0	0.0	9.1	16.7	22.2	0.0	50.0	10.0	0.0
		不明	25.0	0.0	25.0	0.0	0.0	33.3	20.0	16.7	0.0	0.0
		合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

第4節 アイヌの子育て

子育ては子どもを育てるという実態的な面が注目されるが、そのあり方には次の世代に自分たちの文化を伝えていくという意識的な側面が含まれる。

本節では2つの家族における経験、つまり生まれ育った定住家族と、自分が親として子どもを育てる生殖家族の中で、どのような経験をし、どう子どもを育てているのかという点について見ていく。

幼少期にアイヌの子どもとしてどのような経験をしたのか、親や周囲の大人にどのように育てられたのかということ。もう1つは、自分自身が親になった時に、子どもに対してアイヌであることをどのように捉え、伝えたいと考えているのか。そしてそれらの経験や意識、実態は地域によって異なっているのかについて見ていく。

第1項 定位家族における経験

自分自身が子どもの時にアイヌ民族の伝統文化を経験したのかについて、新ひだか、伊達、白糠の3地域における、経験の有無を整理した³⁾。アイヌの伝統文化とは「アイヌ語」「入れ墨・耳輪」「熊猟・サケ猟」「罌炉裏・チセ」「宝物があり大切にする」「イナウ・ヌササン」「儀式・先祖供養」「動物送り」「トゥスクル」である。

地域別、男女別に見ていくと、地域によって異なる傾向が見られた。年齢層に着目すると、どの地域も老年層に経験を持つ者が多いことが共通している。老年層の人々は子ども世代にはまだアイヌ文化が日常の生活環境としてあったとする者が多い。

しかしその内容を見ると、伊達では老年層14名中11名が経験を持ち、祖母が入れ墨をしていたり、罌炉裏があり儀式を見ていたとする。白糠では14人の老年層のうち11人が経験をしているが、祖父母が罌炉裏やカムイノミ、イチャルパなどの儀式を見ていたというように、伊達と同程度の経験の者が多い(表1-13)。

そのようななかで、新ひだかはその内容が濃いことがわかる。23名の老年層の中で18名が経験しているが、その内容は伊達や白糠のような、入れ墨や罌炉裏、イチャルパなどの儀式を見たというばかりではない。

「ほんとのクマをうちで育てて、ばばがご飯やったりして、何かおとなたちが集まって何かやっ
てたな。」

「獣捕ったときに送るのにもやっぱりアイヌの着物着て…。送ってましたね。」

「うちのおふくろの方のばあさんの方さ行ったら、茅葺きの家でね。もう、罌炉裏だから。罌炉裏でもう、焚火だから。」

このように、熊送りや狩猟などの経験を持つ者も多く、祖母の家がチセだったとする者も見られた。アイヌの子どもとしての経験は、年齢層や地域によって経験が異なっており、現在の老年層が子どもだった半世紀前は、新ひだかでは「動物送り」など生活に根づいたアイヌ文化がまだ残っていたといえよう。

第2項 老年層の消極的経験

アイヌ民族の伝統文化について、地域によって経験が異なること、老年層に経験が多かったことを確認した。しかしその一方で老年層の中でも経験がない者も見られた。同じような時代背景の中で、一方はアイヌ文化を日常的に経験し、他方はまったく経験がないというのはなぜだろう。

そこで経験がないとする人の話を整理したところ、子ども時代にアイヌの伝統文化の経験がないとする者は、親の世代であえて「見せない」「聞かせない」ようにしていたのかもしれないという

発言があった。

「ウチの場合は、この辺もそうだと思うんですが、あのね、「アイヌ語を日常会話として使用する」っていうけど、もう…婆ちゃんが入れ墨入ってた人だけど、おまえらはアイヌ語を覚える必要ないって言うて。」

「そのアイヌって言葉自体が。やっぱりそういう言葉の響きが嫌で、まして子どももいたから、そういうものにはなるべく触れないようなことはあったのかもしれない。」

さらに、経験はあるとする者が多い新ひだかの老年層においても、親世代はアイヌ文化を子どもに伝えることについて消極的であったとの発言が見られた。

「結局そういう行事そのものを家庭の中でやること自体が…どうなのかね。あまりできなくなっているのか、という気持ちだったのか。まあ時代が変わったから、これからはお前たちの時代だという意味のことで親は伝えたかったのかな。」

つまり老年層から見て祖父母世代までは、アイヌとしての伝統文化が日常的に見られていたものの、あえて子どもにアイヌとしての文化を伝えるような子育てではなかったのだと見ることができる。

表1-13 子どもの頃のアイヌ文化経験

		性別	実数			構成比		
			経験あり	経験なし	不明	経験あり	経験なし	不明
新ひだか	青年層	男性	2	2	0	5.7	12.5	0.0
		女性	1	4	0	2.9	25.0	0.0
	壮年層	男性	5	5	0	14.3	31.3	0.0
		女性	9	3	1	25.7	18.8	25.0
	老年層	男性	10	1	3	28.6	6.3	75.0
		女性	8	1	0	22.9	6.3	0.0
	合計	N55	35	16	4	100.0	100.0	100.0
伊達	青年層	男性	0	4	0	0.0	21.1	0.0
		女性	2	3	0	11.8	15.8	0.0
	壮年層	男性	2	1	0	11.8	5.3	0.0
		女性	2	9	1	11.8	47.4	50.0
	老年層	男性	6	0	0	35.3	0.0	0.0
		女性	5	2	1	29.4	10.5	50.0
	合計	N38	17	19	2	100.0	100.0	100.0
白糠	青年層	男性	4	1	0	12.9	25.0	0.0
		女性	7	0	1	22.6	0.0	50.0
	壮年層	男性	5	0	0	16.1	0.0	0.0
		女性	4	1	0	12.9	25.0	0.0
	老年層	男性	0	0	0	0.0	0.0	0.0
		女性	11	2	1	35.5	50.0	50.0
	合計	N37	31	4	2	100.0	100.0	100.0

第3項 生殖家族における意識

親世代が子どもへアイヌであることを伝えているのか、さらには血筋としてのアイヌ性だけではなく、アイヌ文化やアイヌであることの意味を伝えていっているのかについて、2つの地域に焦点

をあて明らかにした⁴⁾。

1つは伊達である。伊達地域は早くからアイヌの混血が進んだ地域であった。前節で見たように、アイヌの「純血」性が薄いことについて、アイヌの人々自身が認識している。一方で白糠はアイヌとしての血筋が比較的濃い地域であるといえる。伊達と白糠を対象として、子どもへのアイヌ民族であることの告知と継承について見ていこう。

子どもに対してアイヌであることを「伝えた」「伝えていない」、あえて伝えたわけではないが「自然に」アイヌであることを知っているとする3つに分類した。

「伝えた」とする者を比較すると、伊達が68.8%、白糠が35.9%と伊達が白糠の倍近いことがわかる。それに対して白糠は「自然にわかる」とする者の方が多い（表1-14）。

表1-14 アイヌであることの告知

	伊達		白糠	
	実数	構成比	実数	構成比
アイヌであることを伝えた	22	68.8	14	35.9
アイヌであることは自然にわかる	3	9.4	18	46.2
アイヌであることを伝えていない	7	21.9	7	17.9

これらの結果からは伊達の親世代がアイヌであることを積極的に捉え、子ども世代に伝え、白糠の親世代はあまり積極的に捉えていないのではないかと推測される。しかし、伝えた内容を見るとアイヌであることを積極的に捉え伝えているという趣旨とは少し異なる。

「子どもには高校くらいの頃に、アイヌであるということだけを伝えている。」

「やっぱり言われたように、薄いけど入ってるよというか。」

「ううん、程度とか、そんなんじゃなくて「アイヌの血が入ってるよ」っていうだけで、それ以上の事は（言っていない）。」

「一応「おじいちゃんがそうだった」という話をして、「お父さんがハーフなら子どもたちはクォーターだね」なんて言うぐらいで。」

「そう。有珠はそんなにひどいアイヌの人なんていねえから。皆中間的だから。」

伊達ではアイヌの血筋であることを「薄い」「血が入っている」と、アイヌの混血が進んでいることを、「薄い」「ハーフ」「クォーター」と表現し、その薄さを前面に出して事実を伝えるとする者が多く見られた。またアイヌの血筋であることは伝えるが、だから何があるのかという、アイヌのアイデンティティに関係するような発言は確認されない。

それに対して白糠はアイヌであることを伝え、それを理由にアイヌ文化保存の活動に結びついて例や子どもが日常的に儀式などに触れているとする例が目立った。

「だから子ども達も、「お母さんもお父さんもアイヌだからね」って言って、こういう保存会に入ってるね、踊ったり歌ったりしてるから。子どもに小学校の時からそういうふうにして、そういう

保存会に入って、アイヌの事やってきたから。」

「何で毛深いの」とか「毛生えてんの」とか言われて「いや、アイヌだからだよ」って。説明したことはあるね、子どもに。「だから、お前らもアイヌの子どもだからアイヌの血が入ってるよ、半分ね」って。それに対して、子どもらも嫌だなとも言わないし。言ったとしても仕方がないけどね（笑）。子どもも同じことやってる、今。子ども会のメンバーだし、どっか行くつつたら、踊り披露するし。」

「うちの舅は儀式だとかアイヌ協会の事をやってましたので、必然的に、物心ついた時から「祖父ちゃんはアイヌの血を引いてる、アイヌの行事をやってる」っていうことを知ってたと思うので。小さい時からわかってたと思いますよ。一緒に暮らしてたので。」

白糠の対象者には保存会の活動に関わっている者が多かったことが影響していると思われるが、伊達と白糠の告知には対照的な印象がある。そこでその違いが何に由来するのか次項で検討する。

第4項 アイヌ文化の継承と地域環境

子どもにアイヌであることを伝えるだけでなく、アイヌ文化を伝えたか否かについて見たところ、白糠では子どもや孫に「踊り」や「行事・祭り」「アイヌ語」「儀式」などを経験させているという例が複数見られた。とくに踊りは34.2%、行事や祭りも21.1%、アイヌ語も15.8%ほど見られる（表1-15）。

表1-15 アイヌ文化の伝承

		伊達		白糠	
		実数	構成比	実数	構成比
伝えたアイヌ文化の内容 (複数回答)	踊り	0	0	13	34.2
	アイヌ語	0	0	6	15.8
	刺繍	0	0	1	2.6
	行事・祭り	1	3.2	8	21.1
	儀式	1	3.2	4	10.5
	その他	1	3.2	6	15.8

それらの子どもへの働きかけは、白糠で行なわれているアイヌ三大祭りや、アイヌ文化保存会での活動という環境の要素が影響していると考えられる。

一方、伊達は「行事・祭り」「儀式」それぞれ1人とごくわずかに確認されるだけである。伊達ではアイヌの混血が進み、いわば血筋が薄い現状にあるが、そのことがアイヌとしての意識にも影響を与えているといえる。

また伊達は白糠のように地域をあげた祭りやアイヌ文化を保存するような活動は多くはない。それでもアイヌの人々が集住する有珠地域にある善光寺の裏手に唯一「チセ」がある。それにかかわった経験を持つ者の中には、その経験が親としての意識や行動に影響を与えている例が見られた。

「チセを見に行った時に、「これはパパが作ったんだよ」と言って、「これは何？」と聞くから、アイヌの人たちが昔からしていたことだよ、とか。あとはバチラー教会とかのカタカナ語ですね、アイヌ語を嫁さんのお父さんがきてそういう言葉を教えてもらったりしていましたね。…中略…

少なくとも自分の中にアイヌの血が入っていることを忘れてほしくないし、だからこそすることがあれば、そういうものをやってほしいと思う。自分の目の前にあるなら避けることなく、手伝えることがあればやってほしいし。別に高らかに自分はアイヌなんだということではなくて、避けるのではなくてね。(和人配偶者)」

このように、子どもに対するアイヌ文化の継承に関しては、アイヌの血筋だけでなく、親の意識や経験に加え、現在の環境の中にアイヌ文化に触れる機会があるかどうかが大きく影響していると見ることができる。

先の和人配偶者のように、アイヌとしての血筋や自分自身の経験が少なくても、現在の環境としてアイヌ文化に触れることを通して、次世代に伝える意識を持つ例もあり、アイヌ文化を次世代に伝えていく様々な取り組みが重要な意味を持つことがわかる。

おわりに

本章ではアイヌの人々の家族の形成状況と子育てについて見てきた。札幌、むかわ、新ひだか、伊達、白糠の地域は人口規模も地域環境も異なっており、したがってそこに暮らすアイヌの人々の生活も異なっているのは当然という考えもある。しかし同じようにアイヌの血筋を継いでいても単に居住する地域が異なるという理由だけではなく、アイヌ民族特有の要因が影響しているのではない。

今回5つの地域の比較を試みる中で、その地域のアイヌの人々の特性がいくつか明らかになった。まず1つ目として、アイヌの血筋の濃さは地域によって異なる傾向が見られた。とくに白糠と新ひだかのアイヌの血筋が濃いことがわかった。それらの血筋の濃さは他の側面に影響を及ぼしていた。具体的には婚姻の際に、アイヌの血筋が濃い地域ほど民族性を意識していた。

2つ目として、これまでの報告書でも述べられていたように、アイヌの混血は進んでおり、とりわけ男性より女性にその傾向が見られた。とくに札幌の女性の中には自分自身がアイヌで配偶者もアイヌである人は見られず、今後アイヌの混血がさらにすすむことが予測された。

またそれら血筋という変えることができない要因もあるが、取り組みによって作りだすことができるものもある。その1つとして生活環境がある。生活環境にアイヌの民族文化を伝える仕組みがある地域では、その活動がアイヌの文化を次の世代に伝える役割を果たしていた。これらのことから、民族文化を保存する活動があることが、子ども世代への文化の継承にとって重要であることが改めて確認された。

最後に地域によってアイヌの人々の生活の厳しさが異なっていた。札幌や、むかわ、新ひだかでは、経済的にゆとりがある者も少しは見られたが、白糠の老年層ではほぼすべてが経済的に厳しい状況で、子ども世代からの経済的な援助は見られなかった。

アイヌの人々の家族形成は、アイヌの血筋であることと切り離すことができない。同時にアイヌであることをどう捉え、生活するのかという意識は、生まれ育つ家族の中で育まれる。

いわばアイヌとしてのファミリー・アイデンティティが個人の意識に影響を与えているといえよう。

注

- 1) ここでの「純血」の定義は本人から見て父母や祖父母という上の世代が、アイヌの血筋を引いている場合のことを示している。
- 2) 4世代「純血」とは、本人を含め、父母、祖父母、曾祖父母までがアイヌと確認できた者をカウントしている。なお、これに該当する場合でも、曾祖父母より上の世代で、和人と婚姻がなされている可能性も否定できない。
- 3) 子どもの頃のアイヌ民族文化経験の項目は、札幌とむかわのデータ集計と、新ひだか、伊達、白糠の集計方法が異なっているため、本項では新ひだか、伊達、白糠を分析の対象とした。
- 4) 子どもへアイヌ民族であることを伝えたか否かという質問項目は、2013年の伊達調査から新たに加えた項目である。そのため伊達と白糠のデータのみで分析している。

参考文献

- 小内透, 2014, 「混血の実相と趨勢」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その3 現代アイヌの生活と意識の多様性——2008年北海道アイヌ民族生活実態調査再分析報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 11-25.
- 小内透編著, 2013, 『調査と社会理論・研究報告書 30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室.
- , 2014, 『調査と社会理論・研究報告書 31 伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室.
- 品川ひろみ, 2015, 「アイヌの家族形成」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 33 白糠町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 19-30.

(品川ひろみ)